

# 漢語の意味変化について

## —— 「迷惑」の続貂 ——

欒竹民

### Changing Meanings of Chinese Origin Words: Continuing Explorations of the Word *Meiwaku*

Zhu Min LUAN

In the literature of Nara and Heian Periods the meaning of the word *meiwaku* was primarily the same as the Chinese word it originated from. However, in the late Heian Period it acquired a new usage – *gomeiwaku*. This may be seen as the first step towards Japanization of this word. In Kamakura Period, on the one hand, it continued to be used in its original Chinese meaning, on the other hand, a new usage *konwaku*, *kutsuu* emerged.

Keywords: words of Chinese origins, conventional meanings, changes of meanings, *meiwaku*

- I. はじめに
- II. 「迷惑」のよみについて
- III. 中国文献に於ける「迷惑」の意味用法

- IV. 日本文献に於ける「迷惑」の意味用法
- V. 終わりに

#### I. はじめに

一つの言葉は時には大きな政治問題を招きかねないこともある。「迷惑」は正にその一例で、1972年日中国交正常化のため、中国を訪れていた田中首相は周恩来総理主催の宴席において過去の戦争に触れて反省、謝罪の弁として「多大な迷惑を掛けた」と述べたという。それが「添了大麻煩」と中国語に訳され、耳にした周恩来を含めた中国側の出席者は全員莫大な被害を被ったのに、ただの「迷惑をかけた」という程度のものか、驚愕の念を禁じ得なく、会場の友好的なムードもこの一言で一転した、といった逸話が当時巷の話題となっていた。「添麻煩」は中国語では面倒を掛けたりするぐらいのことに対して軽い謝罪のことばであるためである。抑も「迷惑」は中国語の出自の漢語であるが、中国語には上記のような意味が見られないのである。さて、「迷惑」という漢語はいつの時代日本語に流入し、また、日本語においてどのように使用されてきたのか、以下、それを巡ってその典拠となる中国語と比較しながら時代別、文章ジャンル別に考察、解明してみたい<sup>1</sup>。それに先だって、先ず「迷惑」のよみ

を確認する必要がある。

#### II. 「迷惑」のよみについて

漢語の源流の考察に際しては、日本語への流入過程において、内典と外典のいずれからかについて考えるべきで、それを明らかにするのに漢語のよみを確定することは有効な手続きである。「迷惑」は仏教の書から日本語に入った呉音よみの漢語であるとされる<sup>2</sup>が、果たしてそうだったのであろうか。この節はこの点について古辞書や古文獻に検出した具体例を挙げつつ検討を加えてみる。

先ず、「迷惑」という二つ漢字はそれぞれ漢音と呉音のよみを確認しておく。

迷 (去声) メイマヨウ (フ) 37 4 3 (法華経音訓)  
惑 (入声) ワクマトウ (フ) 95 2 3 (同上)

のように、「迷惑」の呉音よみとしては「めいわく」となり、声調は「去声」と「入声」からなることが明らかである。それに対して漢音資料の『長承本蒙求』及び『図書寮本文鏡秘府論字音点』には

「迷惑」の「迷」は載っていないが、同韻字が見られる。

子（上声）路（去声）口負（去声）フ米（上声濁）ヘイ（長承本蒙求15）

惑（入声）（コク）（長承本蒙求・147）

齊韻（開口）鞞ヘイ（図書寮本文鏡秘府論字音点・地71）

迷莫兮平声齊韻清濁（新訂韻鏡）惑（或）胡国入声徳韻（同右）

迷莫兮切13平声（広韻）惑或43入声（同右）

の如く漢音よみとしては「迷」は呉音のそれと違って平声濁「ベイ」となるが、「惑」は入声清「コク」であることが分る。次に古辞書に掲載されている「迷惑」を挙げて見よう。

迷（平声濁）惑（入声）メイワク（前田本色葉字類抄・上疊字53ウ⑤）

迷（平声濁）惑（入声）メイワク（尊経閣善本三卷本色葉字類抄・上疊字53ウ⑤）

とあるように、注釈音としての「メイワク」は呉音よみであるが、付いている声点からは漢音よみ「ベイコク」であるはずである。何故かかる拗れた現象が起ったのかに関しては後に触れる。

迷惑メイワク（尊経閣善本二卷本色葉字類抄・下疊字27オ④）

迷惑人情口又メイワク又ヘイコク（黒川本色葉字類抄・上疊字60オ③）

「迷惑」は人情部に配属され、呉音と漢音の二通りの字音よみが記されている。次に古文獻に見えた「迷惑」を列挙して、そのよみを考察する。先ず、仏典から見出せた例を挙げて見ることとする。

凡愚たる三有に迷惑せる難（片仮名は傍注、平仮名はヲト点、以下同）（西大寺本金光明最勝王経・卷二37⑫）

迷（音合符）惑して了（正倉院聖語蔵本大乘大集地藏十輪経・106）

迷惑めいわくまとい（右注）して、教けうをうけし（妙一本仮名書き法華経・卷一方便品第二）

のように仏典における「迷惑」は「メイワク」と呉音よみされていることが明らかになるが、漢籍ではどうであろうか。

精神クマシイの更ヒに迷マトハス（訓合符）惑（醍醐寺本遊仙窟・7ウ②）

「迷惑」は字音読みではなく、訓読みされているのである。しかし、『遊仙窟』の他の異本では同じ

箇所は所謂文選読みとなっているが、その字音読みが付いている声点から漢音よみと推定される。亦、紛れもなく漢音よみの例は『久遠寺本本朝文粹』に見えた「迷惑」であり、上掲の『前田本色葉字類抄』の声点と一致している。換言すれば、『前田本色葉字類抄』の「迷惑」に付いている漢音よみの声点は漢籍において「迷惑」が漢音よみされてはじめて可能となったと言えよう。

精（平声）（音・訓合符）ノタマシキ神更トマトフに迷（平声濁）（音合符）惑ヘイナムと（金剛寺本遊仙窟・15④）

迷（平声濁）（音合符）惑コクシ失ヨリコロ據（久遠寺本本朝文粹・卷十四為左大臣息女御修四九日願文）

以上の考察を通して次のことが判明した。「迷惑」という漢語は日本語に入ってそのよみとしては訓読みと音読みの二通りが共存していたが、早い時期に字音読みは確立されて次第に勢力を増し、一方、訓読みの方が衰退の一途を辿った。これは上記の古辞書の記載に裏付けられる。亦、同じ字音読みは文献の素性によって漢音と呉音という二種のよみが併存していて、これは『黒川本色葉字類抄』にある「迷惑」の注釈からもその一端が伺える。しかし、『前田本色葉字類抄』などの注釈音に示されているが如く、呉音読みは早い時期に字音読みの主流となって、最終的に現代日本語のように漢音読みは完全に姿を消したのである。但し、これを以て「迷惑」が仏典から日本語に流入したとは断定し難い。尚、上掲の『前田本色葉字類抄』において声点からは漢音よみと推定されるが、注釈音は呉音となっている、といったような「迷惑」音読み上の齟齬については、恐らくその時点においては漢音よみと呉音よみが拮抗状態にあり、その過渡期に生じた現象であろうと考えられる。それは『前田本色葉字類抄』以降に成立した節用集をはじめとする中世の古辞書に掲載されている「迷惑」のよみがいずれも呉音とすることからも示唆される。

### Ⅲ. 中国文献に於ける「迷惑」の意味用法

先ず外典に見える「迷惑」に目を向けてその具体例を挙げて意味用法について考えることとする。

1. 舍大道而任小物、故上劳煩、百姓迷惑、而国家不治（漢字表記上変更あり、以下同）

（管子・卷第15任法）

法制に任せて事を行う聖明たる君主に対して昏君

が「自然の大道を頼らずに人為的な細事をあてにするから、民は惑乱して、国は安定に至らないのである」と解される。「迷惑」はどうすればよいかと迷い、途惑うというような意味を表す。次の「迷惑」も同様に使われる。

2. 故民迷惑而陷禍患（句子）

3. 且燕国大乱、君臣失計、上下迷惑（史記・魯仲連伝）

燕国は大乱に陥り、君臣ともに失策を重ね、上下ともに思い惑っていると解されて、「迷惑」は例1と2と同じくどう対処するか分らずに、迷ったり惑ったりするように用いられる。

4. 四面受敵吾三軍恐懼士卒迷惑（六韜）

敵に包囲されて兵士は「周章して困惑する」という意味の「迷惑」となる。

5. 擅創為令、迷惑其君（管子・卷第11四称）

昔の無道の臣の所為についてその悪事を詳細に挙げていの中で「自分勝手に出鱈目な令を下し、主君を惑わす」は悪行の一つであると警告する。「迷惑」は使役的な用法で迷わせるかまたは惑わすという意で用いられる。

6. 縫衣浅帯、矯言偽行、以迷惑天下之主（莊子・盜跖編）

「迷惑」は例5と同じく「出鱈目の言葉や行動を振りかざして天下の主君を惑わす」と解釈される。

7. 水深橋梁絶、中路正徘徊、迷惑失故路（全三国詩・卷1苦寒行）

この韻文の「迷惑」は道に迷うということを表す。しかし、上掲の6例のように何かの不都合で良くないことによって生じてくる迷いに止まらず「困惑」や「惑乱」という被害或いは不利益のような含意をも伴ってくるのとは異なる。

続いて内典の「迷惑」について法華經に見えた4例を中心にその意味用法を検討する。

8. 無智者錯乱、迷惑不受教（法華經・方便品）

cf. 無智のものは錯乱し、迷惑して、教をうけし（妙一本仮名書き法華經・方便品）

参考例の傍注「まとい」から分るように「迷惑」は道理に迷い、途惑うことを表す。残りの3例も同じ意味として用いられる。

9. 迷惑不信受、破法随惡道（法華經・方便品）

cf. 迷惑して信受せし。法を破して、惡道におちなん。（妙一本仮名書き法華經・方便品）

10. 斯法華經、為深智說、淺識聞之、迷惑不解

（法華經・譬喻品）

cf. この法華經をは、深智のためにとけ。淺識は、これをききて、迷惑してさとらし（妙一本仮名書き法華經・譬喻品）

11. 迷惑無知樂著小法（法華經・信解品）

cf. 迷惑無知にして、小法に樂着せり（妙一本仮名書き法華經・信解品）

次の例は道や道理に迷い、惑うことから比喩的に酒などに魅了させられて耽溺するという意味で「迷惑」が使われている。

12. 迷惑於酒者、還有酒伴党（長阿含經・卷第十一）

13. 心不決定故、迷惑賊所得（菩提行經・卷第一）

14. 逞心犯戒、迷惑於酒（法句經・卷下）

以上の考察を通じて中国文献に於ける「迷惑」はその意味について以下のように記述できるかと思う<sup>3</sup>。

- 道や理非に迷い、惑うこと。
- 人の行為などで途惑うこと或いはその人を迷わし惑わすこと。

となるが、現代日本語のような意味用法は確認出来なかった。かといって、どうしたらよいか分らず途惑うという意味特徴を呈するように、苦しい思いをしたり、不利益を蒙ったりするといった現代日本語の「迷惑」の示しているマイナス的な意味には至っていないが、どうしたらよいか決められなくて悩み、思い惑うというマイナス的な兆候を見せ、いわば現代日本語の「迷惑」の意味を産出させる素地となっているかと思われる。

次に日本文献に於ける「迷惑」の意味用法について時代別、文章ジャンル別に考究を加える。

#### IV. 日本文献に於ける「迷惑」の意味用法

##### 1. 奈良時代文献

「迷惑」という漢語は早くも奈良時代の日本文献に登場していて、日本語への導入が早かったことを物語る。以下その用例を列挙してその意味用法を考察する。

1. 有人占云。是邑人必為魅鬼迷惑（日本書紀・欽明天皇五年十二月）<sup>4</sup>（傍注、返点等略）

「迷惑」は受け身の用法として惑う、つまり魅鬼に惑われて「亦如前飛相聞」となる。中国語の本来の意味をそのまま踏襲していると言えよう。

2. 方便品 何不未發衆生令生道樂、猶使迷惑也  
(大日本仏教全書第一卷・伝聖徳太子撰法華義疏卷一269下1)

3. 迷惑無知樂著少法者(同上卷三・296上13)

2と3の「迷惑」は上述の中国文献の内典である法華経のそれと同じく用いられていると見られる。管見の奈良時代文献には上に挙例した三例のみとなるが、その意味用法はその出典である中国語をそのまま継受していると言ってよい。即ち、「迷惑」は日本語に導入された当初は本来の意味用法が保たれたままで用いられていたのである。

さて、平安時代に下った「迷惑」は果たして奈良時代文献のそれと同じか或いは異なるのか、以下それについて平安時代文献に見られる「迷惑」に目を転じてその意味用法について考究を施す。

## 2. 平安時代文献

先ず、平安時代の漢詩文や往来物に検出できた「迷惑」を中心に考察するが、管見のところでは次のような4例しか見いだすことが出来なかった。以下その全用例を挙げて検討を加えてみる。

1. 宛轉不閑如臥鑪炭之上迷惑失據似入重霧之中(声点、返点、傍注略)(久遠寺本本朝文粹・卷十四為左大臣息女御修四九日願文)

愛娘に死なれた左大臣が悲痛な心情の余りに「迷惑失據似入重霧之中」となった。つまり五里霧中に入るが如く「迷惑」はどうすべきかの判断に迷い、何を為すべきか分からなく唯悲しみ嘆くのみである。

2. 事々違例心神迷惑半死遁去(本朝統文粹・狐媚記 192.5)

ここでは「心神」が人間の知・情・意を司る場所として使われている。それが「迷惑」するのはものの判断、分別が出来なくなり、意識朦朧の状態に陥るということである。

3. 六君夫高名相撲人也、(略)腕力筋・股肉、支成・骨連、外見当迷惑、況相敵忽憶病(新猿樂記・303上14)

cf. 名虎元来大力なれば、腕の力筋太、股の村肉籠たり、枝の連様、肩の渡広、足の跋扈外見に可迷惑之処に(源平盛衰記・32維高維仁位論争)

参考例を併せて考えれば、筋肉、筋骨隆々とした力士を見るだけでも「迷惑」してしまう。「迷惑」は余りの強さに圧倒されてどうしたらよいか惑い、

慌てふためくということを表すが、後続文「況相敵忽憶病」の示すように、強敵の前にどうにもならないため、動揺、困惑という心情も滲み出る。つまり、単に迷ったり惑ったりするのみならず、手に負えない故の困りと悩みといった意味合いも内包しているとも言えよう。斯様な「迷惑」は前述した中国文献にも見えたのである。

4. 才短ノ詞不辨-理非-。迷惑失度ヲ歎(貴嶺問答)

「迷惑」は前文の「不辨理非」から推して道理を弁えずに迷うという本来の意味で用いると理解されよう。

以上例示したように「迷惑」は中国語のままで使用されていることが判明した。ところで同時代の他の文章ジャンルに於ける「迷惑」は如何なる意味用法を見せているのか、以下その点を巡って漢字によって書き記された史書、日記、文書、説話等に見られた19例を中心に検討する。尚、平安時代の仮名で書かれた所謂和文文献には「迷惑」の所在が確認出来なかったと断っておく。

5. 皆已焼滅然後入山迷惑不知所<sub>レ</sub>為(日本靈異記・218.10)

「迷惑」は道に迷って方向を失うという本来の意味で用いられる。つまり後に山に入り道に迷い、為す所を知らぬと解せられる。次の2例は使役的な用法で迷わしたり惑わしたりする意味としての「迷惑」となる。

6. 蛇子皆出迷惑之嬢乃醒言語(同上・259.8)

7. 加以一物之価東西不<sub>レ</sub>同売買之輩彼此相疑非<sub>レ</sub>唯民迷惑-多致<sub>レ</sub>公損-(類聚三代格・卷十七 539.7)

尚、同時代の『狐媚記』に見られたように19例の内に5例も「迷惑」は「心・心神」と共起しつつ用いられている。そのいずれもものの判断、分別が出来ずに困惑することを示すものであろう。

8. 誅<sub>二</sub>十二人頸<sub>一</sub>訖時、山繼心迷惑(日本靈異記・267.7)

9. 留神嘉殿避火、此間心神迷惑宛如夢裏(三代御記逸文集成・118.9延長4年(927)9月)

10. 痢病数十度、寸身熱如火、心迷惑(小右記・223.14永祚元年(987))

11. 而業已成間心神迷惑不知東西(帥記・121下 5永保元年(1081))

12. 凡心神迷惑、東西不覚者(宇槐記・312下7)

治承3年(1179))

亦、次の例は前掲の同時代の例3と同様に「迷惑」は唯迷ったり惑ったりするのではなく、どうにもならないことによってその仕方なさままたは困った気持ちを伴ってくる用例である。

13. (九月十二日) 予今遇此時不運之甚也、萬事只一人勤仕、愚蒙之性更以迷惑、又非木石身、不可堪忍、何為哉(春記・202下8長久元年(1040))

cf. (九月十日) 予一人行萬事、愚頑之性殆以迷亂、何為之(同上・199下14同上)

cf. (九月十三日) 予身力已屈了、無為術、愚頑之人、臨時大事、弥以迷亂耳(同上・203上11同上)

14. 從京極下御座、見物成市、從近衛東行、(略)見物之者迷惑散々嗚呼、向九条申剋婦(後二條師通記・258.12)

以上の考察を通じて平安時代の「迷惑」は奈良時代に続いて基本的に中国語の意味をそのまま受け継いでいることが明らかであるが、用法上では下記の例のように敬意を表す接頭辞「御」と結合した「御迷惑」という語形態が初めて登場するようになり、日本語への同化振りを見せている。但し、意味は本来のままと見られる。

15. 親疎誹謗、已無所謝歎、偏是入道殿御迷惑之至歎(兵範記二・62下5久寿2年(1155))

### 3. 鎌倉時代文献

鎌倉時代文献は大きく分けて、漢字によって書かれた所謂日本漢文、仮名で書き記した和文及びその両者が混じった和漢混淆文に大別できるが、前時代と同じく和文には「迷惑」を検出できなかった。尚、日記の性格上のため平安時代に跨る文献もある。

次に先ず当時代の漢文に於ける「迷惑」の意味用法に関して考究してみる。今回調べた限りの鎌倉時代漢文文献から58例の「迷惑」を見出した。先ず、この時代の仏教文献に於ける「迷惑」を挙げてみよう。

1. 沈没於愛欲広海、迷惑於名利太山(教行信証・卷第三609下11)

「迷惑」は名利に眼がくれて道理や義理に迷うという本来の仏典での意味を踏襲していると見られる。次に古記録にある「迷惑」を列挙してみよう。

2. 大旨雖同、聊相違、是非迷惑了(玉葉・建久4年(1193)4月日)

「迷惑」は理非の判断に迷うという本来の意味として用いられる。次の例は前時代に続き「心神・神心」と共に使用され、ものの判断や弁別が出来ずに途惑うことを表す。

3. 御歎樂之体、更以驚目、凡心神迷惑(同上・正月3日)

4. 心神迷惑、前後不覚云々(明月記二・387上3)

cf. 心神迷亂萬事不覚(同上・86上8)

しかし、次の例は迷い、惑いと同時に困惑して不快な心情も含有する「迷惑」となる。

5. 大将以人示親宗云、天下之乱君之御政不当等、偏汝所為也、(略)親宗迷惑、逐電退出之後閉門戸了云々(玉葉・養和2年(1182)3月12日)

容赦なく叱責されたことから考えれば、「迷惑」は親宗が途惑うばかりか、気が重く困ったりするというように使われていると解される。次の例も同様な意味を示している。

6. 郎徒数人搦隨身一人(不知誰人隨身)隨其後同上立釣殿、窈窕群妓皆以迷惑殆欲入池中(同上・安元2年(1176)3月6日)

「迷惑」は突然の出来事に「窈窕群妓皆」が慌てふためくと同時にその対処に困惑もしたりするというように用いられている。尚、下記の例は困りに止まらず苦しみという意味も含まれる。

7. (7月1日) 今日炎氣殊以難堪、上下不能堪忍、自去夜一重如此炎旱早重、定可知人々迷惑、上下只羞冷水之外、無他之治方(平戸記・仁治元年(1240))

cf. (7月7日) 炎旱逐日興盛、誠可愁也(同上)

cf. (7月13日) 炎日如火、諸人似病之窮困(同上)

「迷惑」はどうしたらよいかという戸惑いだけではなくおなじ「炎旱」によって生じた参考例の「愁、窮困」というような意味も持ち合わせて用いられる。

8. (10月9日) (佐渡院去月廿二日崩逝了) 哀慟之至、無物取喩、年来偷待再覲、今已聞此事、仰天伏地、迷惑之外無他耳(同上・仁治3年(1242))

cf. (10月6日)朝夕咫尺、旦暮不忘、偏憑再觀之処、忽聞此事、心肝如春、悲哉々々(同上)

「迷惑」は佐渡院の急逝のため、前文の「仰天伏地」の意味を併せて考えれば、単に困惑するのではなく、参考例の同じ出来事に対して用いられる「悲哉々々」のように悲痛という意味も内包している。次の「迷惑」の例も同様に用いられる。

9. 辰時許為小便立行走、出簾外還入、忽稱心地悪由、父母周章之間、自足即時冷昇次第色変死了、二親雖迷惑遂以無詮(明月記・三309下5)

子息の急死に対して両親の「迷惑」は大変困惑すると共に悲しみも併せて表出していると思われる。次に和漢混淆文に於ける「迷惑」の意味用法について具体例を挙げて分析、検討する。

10. 龍猶吐レ気ヲ害将ニ及レ身ニ、觀海大恐、心神迷惑、則歸ニ命シテ菩薩ニ(古今著聞集・80.7)

11. 荊軻たち帰て、舞陽またく謀反の心なし、ただ田舎のいやしきにのみなれて皇居になれざるが故に心迷惑すと申ければ、臣下みなしづまりぬ(覚一本平家物語・巻5咸陽宮)

cf. 皇居未レ馴故ニ心迷惑スト云ヘリ其時臣下皆静(平松本平家物語・巻5燕太子丹謀反咸陽宮事)

12. 先日来の坊布施の分とて、美濃絹十疋且々として出したりければ、坊主心中迷惑して、さきに女房の将来といはれたりしよりも猶はづかしくこそ覚けれ(八幡愚童訓乙)

上掲の3例の「迷惑」は「心神、心、心中」と共起してどうしてよいか迷っているという本来の意味で用いられる。しかし、下記の例はどうにもならない、叶わないという困惑の意味を随伴する「迷惑」となる。

13. 名虎元来大力なれば、腕の力筋太、股の村肉籠たり、枝の連様、肩の渡広、足の跋扈、外見に可ニ迷惑之処に(源平盛衰記・32維高維仁位論争)

「迷惑」は強健な体格が相手にとっては途惑うばかりか、とても相手にならないほど難儀であることを表すかと考えられる。次の例は頼朝を助けたい一心である池殿に頼まれた重盛が一度父親の清盛を説得したが失敗を食らって再度説得しようという場面

において「迷惑」が用いられている。

14. 頼朝を助けて、家盛が形身に尼に見せ給へ」と宣ひければ、重盛参りて父にこの由申されけり。清盛聞きて、「池殿の御事は故殿の渡らせ給ふと思ひ奉れば、如何なるあま逆の仰なりとも、違ふまじとこそ存ずれども、この事は由々しき重事なり。(略)」とて、以の外の気色なり。左馬頭帰参りて、叶難き題目なる由申されければ、池殿涙を流して、「(略)、哀尼が命を生さんと思召さば、兵衛佐を助けて給へかし」と嘆き給へば、重盛も迷惑せられけるが、涙を抑へて、「さ候はば今一度、御詮の趣を申してこそ見候はめ(有朋堂文庫平治物語・頼朝遠流に宥めらるる事)

cf. 重盛、のたまひければ、清盛聞て、「(略)」とて、分明なる返事もなし。重盛、池殿に此よしを申されければ、池殿、仰けるは、「(略)」とて、うち泪ぐみ給ひけり。重盛、かさねて大弐殿に申されけるは(岩波新日本古典文学大系本平治物語)

cf. 重盛池殿ニ此由申サレケレバ、涙ヲ流給テ、「哀恋シキ昔哉。(略)、頼朝切ラレバ我モ生テ何カセン。更バ飢死ニセン」トテ、湯水ヲモ見入レ給ズ臥沈テ泣ケレバ、重盛此由聞給、清盛ノ御前ニ参テ申サレケルハ(半井本平治物語)

cf. 重盛池殿にこのよし申されければ、涙をながし給ひて、「あはれ恋しきむかしかな。(略)頼朝きられは我も生きて何かせむ。さらは干死にせむ。」とて、湯水をものみ給ずとて、ふししづみでなけれければ、重盛この由き、清盛の御まへにまいり(金刀比羅宮本平治物語)

cf. 重盛、池殿にこの由申されければ、涙を流したまひて、「あはれ、恋しき昔かな。(略)頼朝斬られは我も生きて何かせん。干死にせん。」とて、湯水をも飲み入れたまはず、伏し沈みて泣なけれければ、重盛、この由聞き、清盛の御前に参りて(陽明文庫平治物語)

参考例として挙げた諸本には同じ場面というものの、「迷惑」の使用が見られない。しかしながら、「頼朝が斬られでもしたら、私は生きていくかいが

なく、餓死する覚悟だ」と泣き嘆いて再度重盛に頼朝を助けようと懇願した池殿と聞く耳を全く持たない父の清盛との板挟みに立たれた重盛としては正に例の14「迷惑せられける」の示すように大変困ってしまうという心情であると読み取れる。有朋堂文庫平治物語に見られた「迷惑」は他の諸本の不明瞭な表現を以て表した重盛の困惑たる気持ちを明瞭化させたと言ってよかろう。

以上、鎌倉時代文献に於ける「迷惑」について考察を加えたところ、前の時代に続いて本来の中国語の意味用法をそのまま受容する一方、現代日本語の「迷惑」の意味に繋がりうる困惑と苦痛という新しい意味も派生したことが判明した。亦、サ変動詞としての用法も確認できた。斯様な新たな意味は後の室町時代に受け継がれて同時代の古辞書等にその所在が見られる。

#### 4. 室町時代文献

室町時代以降の「迷惑」を巡って既に福島邦道氏や大塚光信氏がキリシタン資料や朝鮮資料更に古記録、狂言集などを駆使しながらその意味用法について精考を行い<sup>5</sup>、筆者には負う所が多々ある。以下は先行研究の成果を踏まえつつ先行研究において使用されていない文献の調査によって検出された「迷惑」の意味用法を検討し、前時代のそれとの相関関係をも考える。まず、室町時代成立の古辞書に見られる「迷惑」を挙げて見よう。

貧 クワゾレ 迷惑心也 (伊京集)

浮沈 迷惑之義 (伊京集、文明本、天正17年、正宗、広本、図書寮本、黒本本節用集)

迷惑 めいわく まよひまどふ 苦しむ めいわく也 困 同義  
 赤面 せきめん めいわく也 なんぎ 難儀 めいわく也 なんがん 難勘 めいわく也 浮沈 迷惑之義 (和漢通用集)

Meiuacu メイワク (迷惑) 苦悩、あるいは、心を痛めること・例、Meiuacu xenban nari (迷惑千万なり) この上ない悩みと苦しみとを感ずる。

Meiuacuna メイワクナ (迷惑な) 心を痛ませるような(こと)、または、苦悩ヲ引き起こすような(こと) (邦訳日葡辞書)

Fuchin フチン (浮沈) Vqi.xizzumu. (浮き、沈む) 人が波とともに、あるいは下へあるいは上へとぐるぐる転回しているような苦労や艱難。(邦訳日葡辞書)

以上に列挙した古辞書の義注に依れば、「迷惑」

は「苦」「困」「悩」「恥」といった多様の意味を有することが明らかであり、鎌倉時代のそれを継受すると共に新たな意味も産出し、多義性を呈している意味拡大が増幅した。これらの意味は『多聞院日記』から検出できた112例の「迷惑」にはいずれも確認できるかと思われる<sup>6</sup>。次にその以外の室町時代の文献に於ける「迷惑」を巡って先ず古文書、古記録等に見えた用例を挙げてその意味用法を検討する。

1. 恩暖之旨、頗ル過<sup>レ</sup>分ニ。嚴札之趣、迷惑仕<sup>リ</sup>候 (鎌倉末期成立か) 御慶往来・647.5)

本来の中国語の好ましくない事態によって生じる「迷惑」と違って、寧ろ好ましい事柄つまり相手からの過分の厚意に「迷惑」ということが起きていると言ってよい。ここの「迷惑」は身に余る心遣いに対してどう対応してよいか分らなく心苦しい。いわば恐縮、恐れ入るというような意味で使われる。前掲の古辞書に見られた「赤面」と類した意味であろう。以下の3例も同じ意味で亦、同じく書状に現れるものである<sup>7</sup>。

2. 一同ノ惣劇、不<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>左右<sup>一</sup>之處、委曲ノ芳訊、頗ル令<sup>ニ</sup>迷惑<sup>一</sup>候 (山密往来・298.10)

3. 又兩種給候之条、真実々々更不思寄候つ、迷惑無極候 (高山寺古文書・200僧守融書状応永21年)

4. 本尊脇畫卓一饒。并茶具可<sup>レ</sup>預<sup>ニ</sup>芳借<sup>一</sup>候。又点心等之式。更々迷惑仕<sup>リ</sup>候 (異製庭訓往来・1147上14)

次の古記録の例も同様に用いられる。

5. 嘉礼御しるし進入候、不易御祝着許十分一之事迷惑候、殿下仰之旨、先日伝語候 (康富記・四131上1)

献上の御祝儀の品物が十分の一に止まったという少なさに対して「迷惑」はその贈与側の恐縮または申し訳ないという「恥」の気持ちを表すことになる。下記の例は人生の無常に対しての悲嘆と心痛を表す「迷惑」となる。

6. 高倉被死了、哀慟無是非者也、今年五十二云々、言語道断迷惑云々 (康富記・一65下5)

7. 昨日辰刻中風、今日酉初帰泉之由、只今告来候、凡迷惑無比類候 (園太曆四・301.12)

次の例8は寧ろ現代日本語の「迷惑」の「困る」という「困」の意味として使われていると解され

る。

8. 先日参申候畏入候、仍明後日料袍事、令申他  
所候処、雖無子細候、加潤色候者、不可借之  
由、申候之間、俄及闕如候、迷惑仕候、雖恐  
存候、先日拝見之御袍内々申出度候之間、代  
物兩種、進候（康富記四・179下8）

先方に御袍を「不可借之由」と一旦断ったが、  
「俄及闕如候」言わばまた必要となったということ  
に因る。「迷惑」は大変困っていることを示してい  
る。だから、「雖恐存候」というように、恐れ入る  
と雖も「先日拝見之御袍」を拝借したいのである。  
次の例9も夜が更け、その上くたびれているところ、  
大勢の客に来訪されたという場面に於ける「迷  
惑」は外でもなく日記主にとっては正に困ってしま  
うことを表す。例10も同様である。

9. 夕雨下及夜、九条連歌也、依命予執筆、百韻  
之後退出、（略）、帰宅之処、蔵氷、大学、  
勾堪、三村、大津等入来、此所迷惑之外無他  
（康富記一・200下16）

10. 羽筑已可ニテ五人之奉行トシテ停止了、迷惑  
至極也（言経卿記・310.10）

11. 千種前中納言殿参会申、同為彼相伴也、三獻  
及逆上、仍予盃、千種黃門取之令飲給、迷惑  
至也（康富記二・30上2）

順番として自分の飲む番となるのに、却って「千  
種黃門取之令飲給」という事態によって生じた「迷  
惑至」は極めて困惑して不快であることを言うので  
ある。一方、前の時代に続きもとの意味のままでも  
用いられる「迷惑」も存続している。

12. 先例未堪得、当于座迷惑仕候ぬと存候（園太  
曆一・373.15）

13. 今夕京官除目右筆事、（略）、率爾之至、短  
慮弥迷惑仕候（園太曆一・383.10）

尚、院政期に初めて登場してきた「御迷惑」とい  
う日本語化を遂げた語形式は室町時代文献にはその  
所在が多く確認される。

14. 両院以下御事、御迷惑之間、皇位事更難及御  
意見、只御迷惑之旨也（園太曆四・147.8）

15. 女院御返事両院被下御事御迷惑間、皇位事更  
難及御意見事（園太曆四・137.3）

上記の2例の「御迷惑」はどうしたらよいかと迷  
うという本来の意味で使用されるが、次の例は寧ろ  
現代日本語の「御迷惑」と殆ど変ることなく用いら  
れていると考えられる。

16. 一々ニ聖護院殿ノ印可ヲ不取ハ打捨ト御下知  
ニテ、御迷惑々々ト云々（多聞院日記四・141  
上3）

17. 一日もさやうの御分別ハ帰而御迷惑之由候也  
（上井覚兼日記・74.3）

そのみならず、下記の例の如く、「御迷惑」は  
形容動詞としても使われている。

18. 諸人御親様之事を御忘却候てケ様ニ候哉、  
なとあつかひ候てハ御迷惑たるへき之間（同  
上・8.14）

19. 中書様も御申之事共候ツ、自然此所領御望に  
て、ケ様之事とも仰付候など、世間嘸申候て  
ハ、御迷惑たるへく候（同上・10.8）

20. 本領之事候條、御迷惑ニ存候て、兎角不承ま  
てに候通申上候ツ（同上・125.8）

以下、和漢混淆文に於ける「迷惑」について考察  
を加える。先ず清原宣賢講述の『毛詩抄』に見られ  
た17例の「迷惑」を中心に検討して、その用法に眼  
を転じてみよう。前掲の古文書等と同じく形容動詞  
として、亦、前の時代に続くサ変動詞として「迷  
惑」が使用されている。

21. 春民の迷惑な時分に民に下さるゝを（毛詩  
抄・卷14.221.3）

22. 此迷惑な目にはあうまい物をぞ（同上卷  
18.295.8）

23. 其やうな事はないほどに、迷惑さするぞ（同  
上・卷13.161.13）

24. 天下が悲しみ迷惑して候と云事を作て（同  
上・卷13.176.6）

尚、意味としては上記の室町時代の古辞書に掲載  
されている「迷惑」のそれと殆ど重なる。つまり、  
「恥」を除いて「苦」「困」「悩」などといった多  
義的に用いられる。以下それぞれ具体例を挙げてみ  
る。先ず本来の意味に近似した、使役的用法として  
の「迷惑」を例示する。

25. 軍兵を以てみなをなやまさうと云事ではな  
い、又急難にあわせて迷惑させうでもない  
ぞ。民を帰服させてすくわう用にするぞ（同  
上・卷18.271.8）

「迷惑」はみなを「惑わす」という意味で用いら  
れているが、次の例はいずれも本来の意味を異にし  
る「迷惑」である。

26. （習習谷風、維風及雨、将恐将懼）将恐一恐  
るゝ事のできたは厄難にあう事ぞ。艱難に、



迷惑に及ぶ事が有が、是は我等と汝とばかり  
あうぞ（同上・巻13.150.10）

毛詩の本文「將恐將懼」の事は天候の異変いわば天災であり、それを蒙ることになろう。従って、それに関する清原宣賢の注釈に表れた「迷惑」はそれと併用されている「厄難、艱難」に近い意味で危難、困苦であることを表すと解される。

27.（行彼周行、既往既来、使我心疚）来と云は底を尽いて取と云て、取に来ぞ。返報もあらう事ぢやが其やうな事はないほどに迷惑さするぞ（同上・巻13.161.13）

一族の不遇に置かれている状況に対して用いられている「迷惑さする」は悲しませる、心を痛ませるという意味を示すことになる。次の4例は困苦という意味で使われるものである。

28.（君子作歌、維以告哀）君子が四月八章の詩を作って、天下が悲しみ迷惑して候と云事を作って（同上・巻13.176.6）

29.（我事孔庶、心之憂矣）我ばかりにむぐうの事をせいと云るゝは迷惑なぞ（同上・巻13.188.9）

30.（田業多荒、饑饉降喪）田地があれたぞ。業の字は田をあらいて、草の生しげつたを業と云ぞ。さうある程に、民が饑饉したぞ。是さへ迷惑したに、天から疫病を下いてあるぞ（同上・巻13.197.7）

31. 注云、困時ニ施之、饒時ニ収之と云事があるぞ。春民の迷惑な時分に民に下さるゝを、米できて返しまらするぞ（同上・巻14.221.3）

次の「迷惑」は弱まったり衰えたり病んだりすることによる苦しみを表す。

32. 周室の外に中国があるが、是が衰へてある程に、迷惑した程に、こちらからしんぱつせう事ぢやが、しんぱつせぬは、苕之華にたとへたぞ。花はしぼうだれども、葉のをちぬは、諸夏の迷惑した体、花のしぼうでをちかゝつたは、周室のをとろへた体。猶諸夏已病、而王臣未発（同上・巻15.341.2）

次に『甲陽軍鑑』と『太閤記』に見出した「迷惑」を列挙してみよう。

33. 東坡も人間第一の水とほめ、万に重宝なれ共、大水の時は迷惑いたす。是又すぎてあしき物也。扱火と云物は、是も人を助くる重宝なれ共、過れば焼亡と申て迷惑也（甲陽軍

鑑・品第十四245.4）

「迷惑」は役立つものとしての水と火が度を過ぎれば、役立たないどころか、不利益をもたらす大変困るものとなるといったことを表す。次の2例も同様である。

34. 出頭ぶりををり、諸侍に慮外をするならば、諸人迷惑ながら機嫌をとり（甲陽軍鑑・品第四十65.6）

35. 九州へも二万余騎之勢をつかはししが、大友に通路をさへぎられ迷惑せしなり（太閤記・550.3）

次の例は悲痛、心痛という意味の「迷惑」となる。

36. 晴信は、甘利備前討死を迷惑に思ひ、うはげは機嫌よき様にもてなさるれども（甲陽軍鑑・品第二十六21.9）

甘利備前討死に対して晴信はうわべの様子としては機嫌良さそうに振る舞っているが、内心には「迷惑に思う」。従って「迷惑」は悲しく感じるという晴信の悲痛の心情を表している。

37. 勘定頭、郡奉行、（略）、尤民間の理非を聞分け、依怙なく正直正銘なる生得の者可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>撰出<sub>一</sub>。不仁にして理不尽なるものは万民迷惑する也（武家家訓・遺訓集成土井利勝遺訓・19条）

「迷惑」は不利益をもたらして困るということを表す。つまり、人道に背き理不尽な者が任官されたら人々は大変困って酷い目に遭うと解される。

以上の「迷惑」に関しての考察を通じて、亦、先行研究の考究を併せて勘案すれば、室町時代から江戸時代初期にかけての「迷惑」は用法といい、意味といい、前の時代のそれを上回って、殊に意味の拡大を顕在化させ、多義語への変貌を遂げて、中国語はもちろんのこと、現代日本語の「迷惑」よりも意味の広がりを見せていることが明らかになった。尚、その意味拡大のメカニズムについては次のように考えられるのではないか。つまり、人が急なこと、思いがけないこと、不本意なこと、などといった所謂マイナス的な非常事態に遭遇して、如何に対処するか、どういう対応の仕方を探るかは区々であろうと想定される。どうしたらよいか迷ったり、惑ったりするという心の迷いが先ず生じてくることは極自然な反応或いは対処の仕方と考えられよう。中国語の「迷惑」という本来の意味は基本的にこの

心の迷いという範囲内に止まっている。しかしながら、心の迷いと同時にどうにもならないというやむを得ないという心情も自ずと随伴してくると考えられる。これは日本語における「迷惑」の意味変化を誘発した契機であり、下地でもある。つまり、やむを得ない出来事に直面し、或いはどうにもならない立場に立たされたら、心の迷いのみならず「困惑」「苦悩」「悲痛」などのような感情も生じかねないのであろう。一方、過分の待遇に恵まれても同様にどうしたらよいかという心の迷いも生じてくる。それによって恐縮、恐れ入るというような気持ちが喚起されて、「恥」を感じる。他方、他者がどうにもならない立場いわばマイナスな目に遭うことに対して当然ながら同情、惻隱の心を持つこともありうるため、朝鮮資料などには「気の毒」という対訳語が表れた所以であらう<sup>8</sup>。逆に自分の行為によって他者がどうにもならないというマイナスな目に遭わされたら、現代日本語の「迷惑」の示すように不利益を蒙ったり、不快な思いをしたりすることになる。詰まるところ、日本語に於ける「迷惑」の多義の発生はどうしたらよいかという事態に対して取った多様な対応のあり方に因るものである<sup>9</sup>。

「迷惑」は室町時代に至って多義化の隆盛期を迎え、その多義による便利な一面を見せている。一方、一つの語はあまりにも意味用法を多く有すれば、負担過剰という虞が生じ、意味弁別、伝達には困難が伴ってくることも起りかねない。だから、その意味弁別の機能を強化させるべく、現代日本語に於ける「迷惑」のように中国語の本来の意味まで消えて意味縮小が実現されて、負担軽減に達したのである。

## V. 終わりに

以上、中日両国文献に於ける「迷惑」の意味用法について考究を加えてみたところ、次の諸点が判明したかと思う。「迷惑」は中国語にその典拠を持つ漢語であり、中国文献では、仏典のみならず、所謂外典たる散文や韻文に亘って使用されて、文章ジャンルによる差異が認められない。「迷惑」は日本語への流入が夙に奈良時代にその端を発しており、亦、決して仏教用語として受容され始めたのではないと言ってよかろう。よみとしては、恐らく最初の段階では意識として訓読みされていたが、『色葉字

類抄』にも示されるように早くも音読みされ、定着に至った。但し、音読みは文章の素姓によって漢音よみと呉音よみが共存していた時期があったが、中世に下ると、文献の性格に関わることなく呉音よみに収斂されるようになり、今日に至っている。意味用法としては奈良、平安時代の文献において基本的にその出自となる中国語のそれをそのまま踏襲しているが、平安時代末期に中国語はもとより奈良時代文献にも見られない「御迷惑」という新たな用法が登場し、日本語化への第一歩を踏み出したとも言えよう。鎌倉時代になって本来の中国語の意味を受け継ぐ一方、「困惑」「苦痛」といった新しい意味も発生した。室町時代の「迷惑」は鎌倉時代に生まれた変化義を継承した上、「悩」「恥」という意味も新たに生じて、多義語への変貌を遂げて意味拡大の頂点に達したと考えられる。

## 付記

本稿は、平成5年広島大学に提出した博士論文の作成と共に調査した資料を基に執筆したものである。

## 注

- 1 「迷惑」についての先行研究は管見のところ以下のように挙げられる。

佐藤喜代治『日本の漢語』（256～257頁、昭54.10.20）の「中世の漢語」についての概観において「迷惑」は鎌倉時代までその典拠となる中国語の本来の意味に従って使われていると述べられている。それを受けて、福島邦道「「迷惑」考－対訳による－」（『国語国文』1983.2 京都大学国語学会）に「佐藤氏によれば、平安・鎌倉時代においては道などに迷うというのが「迷惑」の本来の意味であるとされている」と書かれている。続いて「そういう意味がいつごろから日葡辞書に見えるような「苦悩・心痛」の意味に変わったのであろうかということである。さらに、今日のような「困る」の意味に変わったのはいつかという問題もある」と問題提起もなされた。福島邦道「「迷惑」考－対訳による－」（『国語国文』1983.2 京都大学国語学会）において対訳の方法でキリシタン資料及び朝鮮語資料を駆使しながら室町時代以降の「迷惑」の意味用法について精考を行った結果、現代日本語の「困る」と異なって、

「苦惱、心痛」などのような意味として用いられ、「困る」よりその不快、不利益、大変さの程度が甚だしいと明らかにされた。但し、「本稿では、もっぱら対訳による「迷惑」の語義について論じたのであるが、「迷惑」の語史についてはなお述べ足りないところもある」と記されている。大塚光信「迷惑」（『国語国文』1990.7 京都大学国語学会）において注2の福島氏の論考についてそこにおけるキリシタン資料の取り扱い方について、賛同し難いと指摘した上、「本稿は、室町期後半から江戸初期にかけての「迷惑」の諸相を静的に記述しようとしたにとどまるものである」と書かれている。また、堀口和吉「「迷惑」考」（『山邊道』第40号、1996）、近藤明・邢叶青「日本語「迷惑」と中国語「麻煩」の意味・用法の対照的考察」（『金沢大学教育学部紀要人文科学・社会科学編』57、2008）、張愚「本邦文献に見られる漢語「迷惑」の受容－上代から中世前期までの用例を中心に－」（『文献探求』50、2011）、張愚「日本における漢語「迷惑」の変容」（『日本語学会2012年度秋季大会予稿集』）等が見られ、多方面から研究が施されているが、尚、更に考究する余地も残っている。

2 福島邦道「「迷惑」考－対訳による－」（『国語国文』1983.2 京都大学国語学会）

3 迷惑 亦作「迷或」。①辨不清是非；摸不着頭腦。（用例略、以下同）②使迷惑。（漢語大詞典10・漢語大詞典出版社・1992.12）

4 『日本語大辞典』（第二版）には奈良時代の例として挙げられていない。

5 注1、2。例えば、大塚光信「迷惑」（『国語国文』1990.7 京都大学国語学会）において「迷惑」の意味用法についての記述を次のように要約できる。①「迷惑」の主体が「心」以外の場合(a)騒ぐ、乱れること、②「迷惑」の主体が「心」の場合(b)心苦しい、恐縮すること(c)うろたえること(d)困る、苦しむこと(e)困難な・難儀なこと(f)けしからんと思うこと(g)気の毒に思うこと、とされる。その上に更に「「迷惑」は広く概括すれば、事に遇って心神が主なき状態になることが中心であった。そして、キリシタンは、その具現のひとつの形である「苦」を辞書のうちに説いたのであった」とも纏められた。

6 大塚光信「迷惑」（『国語国文』1990.7 京都大学国語学会）において『多聞院日記』の「迷惑」の用例について氏は多数挙げて細かく分析されている。

7 注6に「現今の「恐縮」に近く、前掲「悦び」と共存するものはむしろこの意のものとした方がよく、またこ

れは前述のように書簡においては、（例略）のような常套的な表現ともなった」と書かれている。

8 安田章『朝鮮資料と中世国語』（134頁、昭和55.7.30、笠間書院）において朝鮮語資料『捷解新語』の初本と改修本における「迷惑」について初本では「めいわく」に対して改修本では「なんぎ」「きのどく」と改められていると指摘されている上、「めいわく」は「当惑」を表していたが、現代的な意味への過渡期にあるらしく、原義を保存すべく、他の語に変えられた個所があったのであるとも述べられている。裏返して言えば「めいわく」は「なんぎ」「きのどく」と類意して始めて「なんぎ」「きのどく」に取って代り得るのである。穎原退蔵『江戸時代語の研究』（昭和22.1.10、白井書房）によれば、「きのどく」は改修本成立頃、専ら他に対する同情の意味に用いられているとされている。

9 堀口和吉は特に『狂言』にある「迷惑」を中心に考察して、「「迷惑」の原義は、まことにきびしい精神作用を表す語であったが、その意で表されるような事は、日常生活では頻繁に経験するものではなからう。まず転意した用法は、日常生活で頻繁に経験する困惑や難儀の意でいうものであるから、使用例が多いのは当然である。ここにおいて、きびしさにかなりゆるみは生じたが、まだそれなりに客観的なきびしさをその意味にもつものであった。（中略）、ところが、その緊張も失われ、「迷惑」は、語の意味として心のきびしさを表すという点はまったく曖昧なままに、もっぱら情緒的に他に対する不快感を表す語としてふるまうようになってきたのである」と結んでいる。（「「迷惑」考」（『山邊道』第40号、1996）

## 検索文献

### (一) 中国文献

#### A. 韻文

毛詩・楚辭（哈佛燕京学社引得）、嵇康集（嵇康集校注本）、阮籍集（阮籍上下本）、陸機詩（陸士衡注本）、陶淵明詩文索引（瀝江忠道編）、謝靈運詩（謝康樂詩注本）、謝宣城詩（万有文庫本）、全漢詩索引・北魏詩索引、全宋詩索引・北齊詩索引・北周詩索引・齊詩索引・全三国詩索引（松浦崇編）、全漢三国晋南北朝詩上・下（丁福保編）、玉臺新詠索引（小尾郊一・高志真夫編）、陳子昂詩（陳子昂集本）、孟浩然詩（四部備要本）、王維詩（趙松谷本）、李白歌詩（繆本）、杜詩（宋刻本）、孟郊詩索引（野口一雄編）、張籍歌詩（張籍詩集本）、韓愈

歌詩(廖本), 白代文集歌詩索引(平岡武夫・今井清編), 柳宗元歌集(宋世綵堂), 李賀詩(李長吉歌詩四卷), 杜牧詩(樊川詩集本), 溫庭筠歌詩(四部備用本), 岑參歌詩(四部叢刊本), 何氏歷代詩話(艾文博主編), 漢詩大觀(井田書店), 唐詩鑒賞辭典(上海辭書出版社), 宋詩鑒賞辭典(上海辭書出版社), 宋詞鑒賞辭典(北京燕山出版社)

## B. 散文

周易・尚書・周禮・儀禮・禮記・春秋左傳・春秋公羊傳・春秋穀梁傳・論語・孟子・孝經・爾雅(十三經注疏), 墨子引得・荀子引得(哈佛燕京學社引得特刊), 管子引得(中文研究資料中心研究資料叢書), 老子索引(豐島陸編), 莊子引得(弘道文化事業有限公司編), 列子引得(山口義男編), 吳子・商子・六韜・呂氏春秋・韓非子・淮南子・說苑(四部叢刊本), 孫子索引(東北大學中國哲學研究室編), 國語索引(東方文化學院京都研究所編), 山海經通檢(中法漢學研究所編), 戰國策(土禮居仿宋本), 潛夫論(四部備要本), 水經注, 孔子家語・論衡・楊法言・抱朴子・西陽雜俎(四部叢刊本), 史記索引(中國廣播電視出版社), 漢書索引(黃福鑾編), 後漢書語彙集成上・中・下(藤田至善編), 方言校箋(周祖謨方言校箋本), 風俗通義付通檢(中法漢學研究所編), 白虎通引得(哈佛燕京學社引得), 三國志及裴注綜合引得(哈佛燕京學社引得), 曹植文集(法蘭西學院漢學研究所), 文選索引(斯波六郎編), 文心雕龍索引(岡村繁編), 蒙求(長承本), 遊仙窟(靛齋寺藏), 世說新語索引(高橋清編), 貞觀政要(貞觀政要定本), 唐律疏議引(莊為斯編著), 陳書評語索引(久保卓哉編), 漢魏六朝小說選譯上(上海古籍出版社), 搜神記・飛燕外傳・迷樓記・開河記・李林甫外傳・李泌傳・東城老父傳・高力士傳・梅妃傳・楊太真外傳・本事詩・劍俠傳・劉無雙傳(晉唐小說・國譯漢文大成), 冥祥記(人民文學出版社), 宋史列傳儒林卷(中華書局), 韞耕錄通檢(逸園覆之刊本), 東京夢華錄「夢梁錄」語彙索引(梅原郁編), 朱子語類口語語彙(塩見邦彦編), 中國隨筆索引(京都大學東洋史研究会編), 中國隨筆著索引(佐伯富編), 金史語彙集成上中下(小野川秀義編), 敦煌變文集(人民文學出版社), 敦煌變文彙錄(周紹良編), 上海出版公司), 敦煌變文字義通釋(新文豐出版公司) 蘇東坡詩集

## C. 佛書

法華經一字索引付開結二經(東洋哲學研究所編), 一切經音義索引(沼本克明・池田證壽・原卓志編, 古辭書音義集成19), 唐招提寺本金光明最勝王經(訓點語と訓點資料第一輯), 山田本妙法蓮華經(訓點語と訓點資料第7輯), 聖語藏願經四分律(訓點語と訓點資料第30輯), 成實論(東大寺圖書館藏), 正倉院地藏十輪經卷5・7(勉誠社), 石山寺藏佛說太子須陀拏經(訓點語と訓點資料第71・72輯合併号), 沙彌十戒威儀經(石山寺藏), 百法顯幽抄(東大寺圖書館藏), 南海寄歸內法傳(天理圖

書館藏), 東寺藏不動軌(訓點語と訓點資料第65輯), 大東急記念文庫藏大日經義釈(訓點語と訓點資料第16・17・23・27・28輯), 大毗盧遮那成佛經疏(高山寺藏), 興福寺藏大慈恩寺三藏法師傳(『興福寺藏大慈恩寺三藏法師傳古点の國語學的研究』・築島裕), 廣島大學藏八字文殊儀軌(訓點語と訓點資料第39輯), 大唐西域記長寬元年点(『古点本の國語學的研究』中田祝夫) 大正新修大藏經, 中國往生傳(東大寺圖書館藏)

## D. その他

說文解字, 說文解字注(上海古籍出版社), 大廣益會玉篇(四部叢刊本), 廣韻・集韻(上海古籍出版社), 龍龕手鑑(中華書局), 類篇(中華書局), 康熙字典(中華書局), 佩文韻府(王雲五編), 辭源(商務印書館), 中文大辭典(中國文化研究所出版)

## (二) 日本文獻

### I. 奈良時代文獻

憲法17條・上宮聖德法王帝記(聖德太子集・日本思想大系), 法華義疏(大日本佛教全書第一卷), 正倉院古文書1-23卷(大日本古文書(一)), 古京遺文(狩谷掖齋編), 統古京遺文(山田孝雄・香取秀真編), 平城宮木簡1・2・3・4, 藤原宮木簡1・2, 長置京木簡1, 平城市長屋王邸宅と木簡(奈良國立文化財研究所), 寧樂遺文上・下, 元興寺伽藍緣起・古事記・新詠華嚴經音義私記・遷都平城詔・造立盧遮那弘詔・貞惠傳・武智麻呂傳・乞骸骨表・私教類聚(岩波日本思想大系), 日本書紀・萬葉集・懷風藻(岩波日本古典文學大系), 風土記漢字索引(植垣節也編)

### II. 平安鎌倉時代文獻

#### A. 和文

竹取物語・伊勢物語・土佐日記・多武峯少將物語・平中物語・大和物語・落窪物語・枕草子・和泉式部日記・紫式部日記・夜の寢覺・狭衣物語(岩波日本古典文學大系), 源氏物語大成(中央公論社), 新訂新編かげろふ日記索引, 宇津保物語本文と索引<sup>本文篇</sup><sub>索引篇</sub>(宇津保物語研究会・笠間書院), 大鏡の研究(秋葉安太郎著・桜楓社), 浜松中納言物語・更級日記・堤中納言物語(岩波日本古典文學大系), 棠花物語本文と索引(梅沢本・高知大學人文學部國語史研究会編), 古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集・新勅撰和歌集・統古今和歌集(新編國歌大觀第一卷), 梁塵秘抄總索引(小林芳規・神作光一・武藏野書院)

#### B. 漢文

文華秀麗集・菅家文草菅家後集・日本靈異記・和漢朗詠集(岩波日本古典文學大系), 文鏡秘府論(圖書寮本), 遍照發揮性靈集・江都督納言集(六地藏寺本), 本朝文粹(久遠寺藏本), 高山寺本表白集(高山寺資料叢書第

二冊), 凌雲集, 経国集, 都氏文集・田氏家集・雑言奉和・栗田左府尚齒會詩, 扶桑集・本朝麗藻・江吏部集・侍臣詩和・殿上詩合・本朝無題詩・法性寺閨白御集(群書類従第六輯), 三教指帰(天理図書館本), 作文大鉢(天理図書館本)

続日本紀・日本後紀・令義解・令集解・続日本後紀・日本文徳天皇實録・三代實録・類聚三代格・弘仁格・延喜式・延喜交替式・貞観交替式・延暦交替式・政事要略・日本紀略・扶桑略紀・百鍊鈔・朝野群載・本朝文集・本朝続文集・本朝世紀(新訂増補国史大系), 律令・本成寺金堂供養願文・革命勘文・藤原保則伝・寛平御遺誡・九条右丞相遺誡・菅家遺誡・陸奥語記(岩波日本思想大系), 古語拾遺(新撰日本古典文庫), 三代御記逸文集成(所功編国書刊行会)

貞信公記・九曆・小右記・権記・御堂閨白記・左経記・春記・水左記・後二條師通記・中右記・帥記・永昌記・長秋記・殿曆・兵範記・台記・吉記・山槐記・猪猡閨白記・勘仲記・歴代宸記・花園天皇宸記伏見天皇宸記(大日本古記録・増補史料大成), 西宮記(増訂故実叢書), 玉葉, 明月記(国書刊行会), 吾妻鏡(新訂増補国史大系), 平安遺文(竹内理三編・東京堂刊行), 尾張国解文の研究(阿部猛著・大原新生社刊), 鎌倉遺文(1~10・16)(竹内理三編・東京堂刊行), 高野山文書(1・4)(大日本古文書家わけ第1), 東大寺文書(1-8)(大日本古文書家わけ第十八), 将門記(真福寺本), 御成敗式目(古典保存会), 明恵上人行状(明恵上人資料第1・高野山資料叢書第1冊), 江家次第・江談抄(新訂増補故実叢書), 平安時代仮名書状の研究(久曾神昇著・風間書房), 雲州往来享祿本研究と索引・本文研究編, 和泉往来(京都大学国語国文資料叢書), 高山寺本古往来(高山寺資料叢書第2冊), 東山往来・菅丞相往来・釈氏往来・十二月往来・貴嶺問答・尺素往来・雑筆往来・垂髮往来・消息往来・常途往来・百也往来・庭訓往来・弟子僧往来集・南都往来・鎌倉往来・賢濟往来・會席往来・新十二月往来・御慶往来・異本十二月往来・手習覚往来・山密往来・十二月消息・新札往来・瑠玉集(日本教科書大系往来編), 金剛波若經集驗記古訓考証稿(石寺本・黒板本), 金剛寺藏注好選(後藤昭雄編・和泉書院), 高野山宝寿院藏日本法花驗記(臨川書店), 往生要集(最明寺本), 選擇本願念佛集(往生院本), 探要法華驗記(醍醐寺藏), 日本往生極樂記, 大日本国法華驗記・続本朝往生伝・本朝神仙伝, 拾遺往生伝, 後拾遺往生伝・三外往生伝・本朝新修往生伝・高野山往生伝・念仏往生伝・往生要集・諸山縁起・白山之記(岩波日本思想大系), 園城寺伝記(大日本仏教全書86巻寺誌部四), 天台座主記(続群書類従第四輯下), 教行信証(岩波文庫), 法然一遍(岩波日本思想大系), 玉造小町壯衰書(山内潤三・木村晟・栃尾武編輯), 浦島子伝・富士山記・続浦島子伝・新猿楽記・傀儡記・遊女記・狐媚記・

暮年記(群書類従第6輯)

### C. 和漢混淆文

東大寺諷誦文稿(中田祝夫・風間書房), 今昔物語集・宇治拾遺物語・保元物語・平治物語・平家物語(覚一本)(岩波日本古典文学大系), 発心集本文自立語索引(高尾稔・長嶋正久・清文堂), 方丈記(大福光寺本), 海道記(尊経閣文庫本), 東関紀行本文及び総索引(江口正弘監修・笠間索引叢書61), 延慶本平家物語(勉誠社), 源平盛衰記(有朋堂文庫本), 沙石集(慶長10年古活字本・勉誠社), 古本説話集総索引(山内洋一郎・風間書房), 打聞集の研究と総索引(東辻保和著・清文堂), 十訓抄本文と索引(泉基博編・笠間書院), 三宝絵詞自立語索引(馬淵和夫監修・中央大学国語研究会編), 三教指帰注総索引及び研究(築島裕・小林芳規・武蔵野書院), 宝物集(書陵部蔵・古典保存会), 法華百座聞書抄総索引(小林芳規編・武蔵野書院), 閑居友本文及び総索引(峰岸明・王朝文学研究会編), 草案集(建保四年本山口光円氏蔵), 明恵上人夢記・却癡忘記・光言句義釋聽集記・梅尾明恵上人傳・梅尾明恵上人物語・明恵上人神現傳記(明恵上人資料第1・2:高山寺資料叢書第7冊), 六波羅御家訓・北野天神縁起・八幡愚童訓甲(岩波日本思想大系), 古事談(新訂増補国史大系), 正法眼藏随聞記語彙總索引(田島毓堂・近藤洋子編・法藏館), 正法眼藏要語(岩波文庫本), 古今著聞集(岩波日本古典文学大系), 中外抄・富家語(勉誠社), 俊頼髓脳・古來風體抄(日本歌学大系第1・2巻), 愚管抄(岩波日本古典文学大系), 歎異抄本文と索引(山田晟編・新典社刊行)

### D. その他

篆隸万象名義(高山寺資料叢書第1), 新撰字鏡(臨川書店), 和名類聚抄古写本声点本文および索引(馬淵和夫・風間書房), 世俗諺文(天理図書館蔵本), 三卷本色葉字類抄(風書書房), 類聚名義抄(図書寮本・観智院本), 名語記(勉誠社), 伊京集・明応五年本節用集・饅頭屋本節用集・易林本節用集・黒川本節用集(古本節用集六種研究並びに総合索引・中田祝夫・風間書房), 文明本節用集(風間書房), 運歩色葉集・温故知新書・撮壤集・頓要集(中世古辞書四種研究並びに総合索引・中田祝夫・風間書房), 古本下学集七種研究並びに総合索引(中田祝夫・林義雄・風間書房)・書言字考節用集研究並びに索引(中田祝夫・小林祥次郎・風間書房), 邦訳日葡辞書(岩波書店), ロドリゲス日本大文典(土井忠生訳), 和漢通用集(勉誠社)